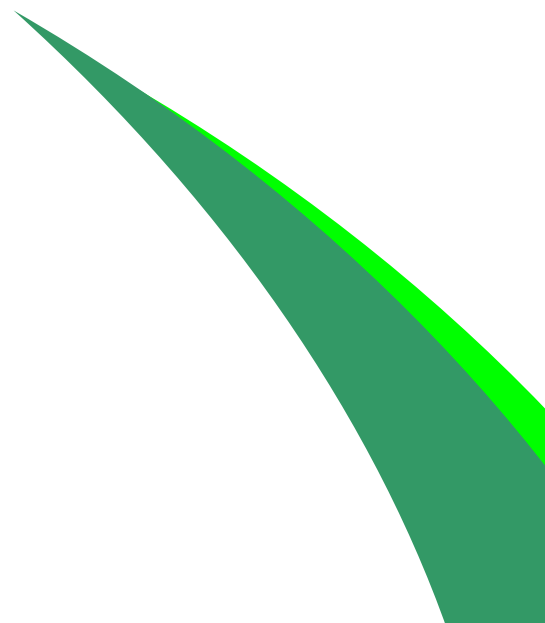


個人総括



日本人参加者



平山祐理

昨年の合同学生会議が終わったとき、自分の中で対話の意義が何なのか全く見つけることができなかつたのを覚えている。

そして同時に、このままでは終わりたくないと思つたのも覚えている。対話によって何が生まれるのか、自分の目で確かめたかった。これが今回の合同学生会議の参加理由である。今回の合同学生会議は昨年と大きく異なり、代表という責任ある立場での参加となった。やはり代表という立場上、自分だけではなく、参加者一人ひとりをよく見なければならず、今回の合同学生会議では他の参加者を見ることでさまざまなことを学んだ。そしてその中で私が一番感じ取つたのは参加者の葛藤である。この合同学生会議の参加者は、相手を理解したいという思いをもってやってくる、誰も最初から激しく言い合いたくてやってくるものなどない。しかしいざディスカッションになってみると、どうしても守らなくてはいけないお互いの権利があり、どうしても歩みよることが難しくなってしまう。彼らはイスラエル・パレスチナ問題という究極的に複雑な問題と、彼らが持っている相手に歩み寄りたいたいという思いの中で葛藤しているのであるということを感じた。その葛藤はきっと私のような日本人は一生体験することなく終わるものなのだろう。日本という日常レベルで紛争状態のない国にいると紛争

地の現実にはこれらの一見単純に見える出来事の裏に人々の葛藤や平和への願いなどさまざまな背景が隠れているということを忘れてはならないと思う。おそらく今現在イスラエル・パレスチナの間でもこのようなメディアのみを通じた誤解のプロセスが繰り返され、顔の見えないもの同士誤解を重ねているのだろう。そして相手の思いを知り、誤解を解くためにはやはり会って話すことが重要になる。私は今回の合同学生会議の参加でようやくこの団体の意義を実感することができた。

今回の合同学生会議は日本人参加者、イスラエル人・パレスチナ人参加者、本当に多くの人に助けられた。特に今回はイスラエル・パレスチナ人参加者が非常に協力的で、彼らを選ぶことができたのが今回の合同学生会議の成功につながつたのだと思う。私は今回の2回目の合同学生会議参加にしてようやくこの団体の意義を実感し、やっとスタートラインに立てた気がする。しかしたった2週間彼らととまって話しただけ、まだ何も知らないことだらけだと思う。ようやく始まつた対話を、この先もずっと続けていきたい。



相澤雄太

「すべての社会には紛争があり、紛争は政

治につきものである」とする考え方があります。

日本も幾多の内戦や大戦を経験して現在の平和を手に入れた歴史を持ちます。私にとって「紛争」はこれまで、机上の概念に過ぎませんでした。しかし今回の学生会議に参加して、その現実を知り、「紛争」という名のもとで人々が互いの生命や

運命を蹂躪(じゅうりん)しあうことが、どれほどの悲しみや不幸をもたらすかということを感じました。

7月に事前オリエンテーションを行うため、イスラエル・パレスチナを訪問した際に、両地域の経済的な格差やエルサレムの独特の緊張、無機質にそびえ立つ分離壁を目で見て感じて、イスラエル人とパレスチナ人が以前は隣人として平和に暮らしていたということ自体、合同学生会議前は想像することが出来ませんでした。しかし、会議中にある参加者は両者が従兄のような関係であると言っていました。確かに、彼等の間には言葉や食事に限らずユーモアのセンスに至るまで似た部分があります。宗教や言語は異なっていますが、政治的な拘束を受けない日本という場では、両者は最良の友人のように見えました。

正直なところ、会議でのディスカッション決して心地の良いものではありません。議論における彼等の話は日本という平和な環境で育った自分には衝撃的であり、時に胸が締めつけられるような感覚

になりました。ただ議論が相手に対する誹謗ではなく、相手を受け容れるものであったということを強調したいです。相手の痛みを知るということは、紛争地で生きる両者にとって大切なことであり、個人が抱える恐怖や怒り、悲しみを三者間で共有出来たことはこの会議の最大の価値であると思います。

両者の話を聞いて、自分が想像していた以上に「紛争による犠牲」が彼等にとって身近なものであることに気づきました。議論の際に、あるパレスチナ人参加者は知人が紛争の犠牲となった話をしながら声をつまらせました。また、あるイスラエル人参加者からは会議最終日の晩に、彼が兵役に従事した際に、たった一日で四人の友人を失ったという話を聞きました。イスラエル人が抱く兵役での葛藤や自爆攻撃への恐怖、パレスチナ人が抱く日常生活での不安を知ったとき、参加者全員が紛争の犠牲者であると感じました。合同学生会議を経たいま、両者に犠牲者しか生まないこの紛争に終わりが訪れることを願ってやみません。



荒井和人

この合同学生会議に参加した動機は何だったのだろうか？今でも時々自分に問いかけることがあります。中東和平に貢献した

いなどという大それた気持ちは無かったにせよ、18歳そこそこの大学生がイスラエル・パレスチナ問題という地理的にも心理的にも遠く、そして大きなものに向き合ったとき一体何を感じ何ができるのかを知りたかったのだと思います。大した心構えも準備もせず駆け込みで参加したこの会議でこれほど沢山のことを考え感じ、そして自分に向き合う機会になるとは考えてもいませんでした。

共同生活ということもありイスラエル、パレスチナの参加者と親密になることにそんなに時間はか

かりませんでした。彼らとともにお互いの食文化や大学生活、恋愛について他愛無い話の中では彼らも私たちと何も変わらない普通の大学生の顔をしていたと思います。だからこそ、ディスカッションの中で見せる、紛争の当事者として時に感情的な議論をする彼らの顔を目の当たりにした時、私は混乱し絶句する他ありませんでした。そして気づいたことは彼らにとって紛争は日常であり、それは私たちにとってのようにテレビの中の国際問題として扱うようなものではないということ。それに気づいたとき、「第三者」という枠に甘んじてこの会議を運営していくことに疑問を感じ、その責任の重さを投げ出して単なる「友達」としての位置に逃げ込もうとしたことも何度もありました。それでもやはり彼らと向き合う時、彼らの背負ってきた過去や、今生きている現在に向き合うことを避けては通れず、その度にまた何も言えない自分にもどかしさを感じて

いました。

しかしそうしている間も会議は続きイスラエル、パレスチナそして日本人の間に信頼という「確かな」ものが感じられ始めたとき、なぜか気が楽になった事を覚えています。すなわち互いに「対立」するはずのイスラエル、パレスチナ人、そして「第三者」であり「無関係」であるはずの日本人の中に信頼が生まれること、それだけでも十分にこの会議は価値のあるものではなのだろうか。



岩崎浩二

“ I completely disagree with your idea ! ” (私はあなたの考えには完全に反対だ)

私にとっての合同学生会議はある参加者から私へのこの発言から始まりました。

長年の間紛争が続くイスラエル・パレスチナ、私は学生の立場ではあるが、現実の国際問題にアプローチするこの活動に大きな期待を抱いていました。私たちがイスラエル人参加者とパレスチナ人参加者の交流に貢献できる。同じ人間同士、会って話せば解決できないことはないだろう。そのように楽観的に考えていました。しかし、私はイスラエル・パレスチナ紛争の複雑さ、現実に紛争の影響を受けている両地域からの参加者の体験に当惑してしまいました。両地域からの参加者とは英語でコミュニケーションを取ります。紛争や政治などに関わる話題を英語で話し合うことは私自身の語学レベルを超えていました。私が意見を述べ、それに対する応答を両地域の参加者からもらいましたが、その内容は部分的に理解できても、全てを正確に理解できないために、正確な応答ができず、大きな悔しさを覚えました。また、カルチャーショックにも遭遇しました。冒頭の書き出しはある参加者

そしてこの会議を続けることを決心した今、それを確信しています。この会議で3者が集まり1つの時間を共に過ごし対話していくことは、たとえ中東和平の観点からみれば小さく取るに足らないようなものであるにせよ、そこに集まった人々の間に信頼が芽生えるという「確かな」ことなのだ。そしてこの「確かな」活動はどんな形であるにせよ続いていくべきであり、私はそれにこれからも尽力したいと思います。

からの言葉です。日本人間のコミュニケーションでは、相手の意見に対して、なかなか自分の意見を全面に主張せず、和を尊ぶ文化がありますが、その参加者の文化圏のコミュニケーションでは、相手のことを批評することが相手の話をしっかり聞いていることを示す積極的な意味になります。

上記のように、今回の合同学生会議は私にとって語学力との戦いだったことは否めません。それでも、私はできる限り両地域の参加者の言葉を理解しようと試みました。自分の考えを何とか言葉にして伝えました。全ての参加者と、とは言えませんが、友情という信頼関係を築くことができました。私が今回の合同学生会議で興味深い経験をするのができたのは、合同学生会議参加者の全員の協力の元で実施した、長野高校生プログラムの企画です。このプログラムは高校生を合同学生会議へ招待する形式のもと長野県長野市で2泊3日にわたり実施することができました。世界の問題に関心を持った世代が続いていくという現実にやりがいを感じました。

イスラエル・パレスチナ紛争が終結し、両地域の人々が平和に仲良く暮らし、この会議を開催する必要のない日が来ること、それが私の希望であり、理想です。その理想のために私自身ができることは微々たることで、成果はすぐには現れません。それでも、私が現実にはできることを、焦らず、諦めず、関心を持って、一步一步積み重ねていくことです。今年の悔しさをばねに、来る来年の合同学

生会議では、両地域の参加者の話を正確に理解し的確な応答をしている自分がそこに居ることを目標に頑張ります。両地域の参加者の交流に貢献できる、そのような立場から合同学生会議に参加したいと考えています。

最後に、イスラエル人参加者、パレスチナ人参加者、日本人参加者、そして、私たちの活動を様々な形で温かく支援してくださった皆様に、心からの感謝の言葉を述べたいと思います。ありがとうございました。



篠田恵

「人生で一番大切なのは想像力を働かせ、他者の立場にたつこと」この団体に出会う以前のことだが、私に向かってこう言い切った人がいた。

しかし、この合同学生会議で経験したことは、私の想像の範囲をはるかに超えるものだった。

長岡で三島祭りに参加した時、打ち上げ花火の大きな爆音に驚いた私に向かってある参加者が、「僕たちは爆発音に慣れているから驚かないよ」と言った。彼は冗談で言ったつもりなのだろうが、そこで私は、彼と自分との間にある埋められない乖離を強く感じたのを覚えている。ディスカッションの最中、イスラエリアラブであるが故に自分の帰属意識をどこにおけばよいのかわからない、と言っていた参加者がいた。イスラエリアラブという存在を知識として知っていながら、私はこの時初めて彼女たちの心の内を想像しようとし始めたのである。合同学生会議中、自分と同じ学生としてイスラエル人・パレスチナ人参加者との間に共通点も感じ

ていたからこそ、これらの経験は私に自分の浅薄さを認識させ、鮮明に残る記憶となった。

置かれた環境や経験の違いから人の想像力、ここでは他者の立場にたつことであるが、そのことには限界があり、埋めることのできない乖離は存在する。今回の合同学生会議を通して私はこの、当然といえば当然の事実をつきつけられたように思う。そしてこの「限界」の存在は私とイスラエル人・パレスチナ人の間だけにあてはまるものではなく、そのままイスラエル人・パレスチナ人参加者間の関係でもあったのではないだろうか。

しかし、この「限界」が存在し、置かれた環境があまりにも異なるイスラエル・パレスチナ・日本の三者間であるからこそ、「対話」の重要性は際立つのだと思う。互いの心境、考え方を理解することは不可能なのかもしれない。それでもなお、自分の想像力の限界を超えようと互いが努めた時に、初めて信頼というものが生まれるのではないか。困難が大きいほど得られる信頼は深いはずで、それを生み出すことのできる対話の場を、これからも作り続けたいと思ったのだった。



加藤愛深

合同学生会議を終えた今、私はようやくスタート地点に立てたのだと感じる。これは全くいい意味で

はなく、自戒の念も込めてそう思う。この合同学生会議で何かをなしえたと、そんな大それたことは到底言えるとは思えない。さらさら言うつもりもない。ただ、本当に貴重な時間を過ごさせてもらったのだと思う。あの貴重な時間を私は受け止め、それに取り組めたのか。私にとってはそれ以前の話だった。自分の力量不足、不勉強さ、そして様々なこ

とに対する自分のいい加減さを思い知らされた、この合同学生会議は私にとってそんな会議だった。

イスラエル、パレスチナ……。私は何を彼らと語りたかったのだろう。日本人という第三者的立場でいろいろな見方ができると、そう言いたかったのかもしれない。その日本人には何ができるのか。合同学生会議前も後もそのことについて考えた。しかし、すでに私たちはこの合同学生会議を開催したのだと、それ以上でも、それ以下でもなく言うことができる。ほんの1時間で行ける距離に住んでいても話すことができない、関われない。そんな彼らがここ日本で共にご飯を作り、語り合ったのだ。彼らの現地での日常を思い描くと、それは本当に驚くべきことなのだと思う。

私が JIPSC に入って1年になる。その JIPSC も今年で6年目を迎え、新たな一步を踏み出したと思っている。6年間このようにイスラエル、パレスチナから学生を招き、ともに合宿を行ってきた。その間にはいろいろな困難や試行錯誤があったのだろう。そしてその都度自分たちの限界を見せつけら

れてきた、そうではないかと思う。今年初めてこの合同学生会議に参加して、私もその難しさを文字通り、肌で感じた。何といっても私は英語力のなさで苦しめられたが、それ以前にもイスラエル、パレスチナについての知識が足りなかった。話したいことはいっぱいあってもうまく言葉にならないし、彼らの言い合いについていけない。そしてやはりうまく言葉にならないその根底には当事者ではない第三者として語る言葉が見つからない、そう感じてしまったことが大きいのではないかと思う。今イスラエル・パレスチナ人参加者に対してそのことを申し訳なく感じる。

この合同学生会議を開く上で、今一度私たち日本人に何ができるのかということに、向き合う必要があるだろう。この6年という月日を得て、機は熟したのではないだろうか。合同学生会議それ自体を開くことから、どう私たちがかわるのかを考え、イスラエル、パレスチナについて、私たちが暮らすこの世界について知り、考えることへと…。



外山雄也

“Everything is possible”

あるパレスチナ人参加者が言った言葉である。いつものように、宿舎のベランダで話をしていたときのこ

とである。偶然、宗教の多様性の話になり、僕が彼女に「君は何を信じるのか」と問うと、彼女は「私は自分の信念を信じる。もし私が強い『思い』を持っていれば、叶わないことなんてないはず。何かか叶わないのは、その人の持っている『思い』が少ないからよ」それが彼女の意味する「Everything is possible」だった。「何か」を強く思うだけで実現することが出来るなんて、言ってみれば、非現実的であり、空想のようなものともいえる。僕も彼女がそう話したときは、そう感じ、特に気にせずに、会話

は別の話題に移っていった。

しかし、あの合同学生会議が終わって一ヶ月たった今、ふと思い出すのは彼女とのこの会話である。なぜそこまで強い印象が僕の中に残っているのかはわからない。ただ一ついえることは、僕が合同学生会議を通して感じた、イスラエル人、パレスチナ人参加者の平和を望む純粋な思い、そしてそれを実現するという強い思いを象徴しているからなのかもしれない。

合同学生会議が始まる前、僕は日常の一部が紛争である「彼ら」をうまく想像することが出来なかった。もちろん、本や映画などで知ることはあっても、彼らの日常や生活というものは僕からは遠く離れたものであった。合同学生会議が始まり、彼らと共に生活していく中で、彼らが自分らと何ら変わらない同じ学生であることに気がついた。と同時に、ディスカッションで目に涙を浮かべたり、12時に鳴

るサイレンを、危険を知らせるサイレンと間違え、表情をこわばらせたりするなど、彼らが紛争を生きているということも実感した。紛争を日常として生きる彼らは切実に「平和」を求めている。そんな彼らは口々に「お互いに妥協をして、現実的な平和」を考えなければならないと言い、平行線を辿るディスカッションや時には感情的になるディスカッションに真摯に取り組んでいた。この問題の複雑性を考えても、お互いが合意に達するのは難しいのだが、彼らは途中で諦めることなく、お互いに意見をぶつ

け合った。そして、あるイスラエル人参加者が言うように、「信頼」を構築することが出来たのだと思う。これは政治的な合意ではないが、大きな意味を持つといえるだろう。

途方もないような問題に対して、正面から向き合っていくこと。そして、そこで生まれてくる「信頼」。「Everything is possible」何かを信じ、希望を絶やさず、問題に向かっていけば、不可能なことはないのかもしれない。今年のイスラエル人・パレスチナ人参加者から学んだことの一つである。



武藤康平

合同学生会議が終了し、ここでの経験を振り返るにあたり、まずはじめに頭に浮かんでくるのは、激しいディスカッションの様子でも、参加者間の意見の

対立がもたらした一時の緊張でもありません。それは、三者が同じ人間である、という、陳腐と言えばあまりに陳腐な、幼稚なある種の感慨です。合同学生会議開催中におけるコミュニケーションは、三者が共通して理解可能な英語に限られます。全員にとって母国語でない、そして必ずしも流暢ではない言語を使って、その上でなお、コミュニケーションが成立することへの驚きは、実質的には本合同学生会議が初めての「異文化との出会い」である私にとってはとりわけ印象深いものでした。言語は障害であり、その影響は軽視されてはなりません。私を含む日本からの参加者は、より一層の英語力の研鑽(けんさん)が求められます。

しかし、それらの障害、もどかしさを越えてもなお、そこに対話と理解が育まれうるという事実の尊さは、イスラエル、パレスチナからの参加者間に、実質的には何の共通見解を構築できなかった論点があるという事実を前にしても、私たちに希望を抱かせる一つのよすがとして、この活動が継続してゆく限り残り続けてゆく価値の一つです。

イスラエルからの参加者から学んだ多くの事柄のなかでもとりわけ印象的であるのは、国家と個人のアイデンティティとの強いつながりです。日本という、比較的、そしてある意味では絶対的に、「平和」である国家に生活する私にとって、私の生活の安全を保障する、物理的・非物理的力を備えた所属先としての国家は、その存在は当然であり、普段意識する類のものではありません。しかし、イスラエルからの参加者は、母国と母国が抱える歴史に真摯に向かい合い、そこでの苦しみを引き受けていました。3つ4つしか年の違わない、同世代と括って問題ないであろう彼らが、私にとっては抽象的なものにすぎない、国家とその歴史を引き受けようとしている姿は、衝撃以外の何者でもありません。イスラエルからの参加者から、「日中の歴史認識の違いとそれが影響を与えているところの両国間関係について、お前の意見を聞かせてくれ」「なぜ日本は移民を受け入れないのか、あなたは個人的にどう考えているのか？」と問われたときに、絶句するほかなかった自分の浅学を、今はバネとしたいと思います。自分が日本人であるということの意味を模索する、模索せざるをえない状況を彼らは私にもたらししてくれました。ある国の国民である、ということ、その国が抱える歴史を引き受けるということ、自らの出自が抱える歴史性と真摯に向かいあうことを、私は彼らから学びました。

パレスチナからの参加者は、私に、当事者しか

理解しえないはず懊悩(おうのう)の一片を、推し量る契機を与えてくれました。まさに問題の当事者、その歴史、その紛争の真っ只中に生きるということの意味。本合同学生会議に参加できる、ということは、避けようもなく彼らが彼の地においては比較的恵まれた環境にあり、十分な高等教育の機会に恵まれている層の出身であることを意味しています。この条件を差し引いてなお、彼らが彼らの生活のなかで紛争に直面し、同胞の苦しみに胸を痛めていること、そうした彼らの経験の総体は、決して本や研究者の講演を通しては触れることのできない類のものです。私はここでも、彼らの抱えるもののあまりの深刻さに、絶句するほかありませんでした。絶句するほかない、ということが絶望に直結せずにいられた事は、ひとえに彼らの明るさ、ユーモアと機知によります。ディスカッション以外の時間、自由時間や夜の消灯後において行われた談笑では、彼らはアラブ特有の諧謔(かいぎやく)精神でもって私たち日本からの参加者をリラックスさせてくれました。合同学生会議での経験が、当然、私たちよりかは、イスラエル、パレスチナからの参加者にとって精神的ストレスを伴うものであつ

たであろうことを鑑みると、彼らの優しさは驚くべきものであったことが、今になって了解されます。また、年の違わない彼らの理性的な振る舞いは、今、尊敬の念と共に思い出されます。

私にとって、同世代の日本人学生との対話もまた、意義深いものでした。縁あって、この活動に参加することになり、参加当初は予想もしなかったような経験の切実さと時間の密度を前に、この貴重な場を共有する同志としての結託が徐々に形成されていく過程は感動的でした。

本合同学生会議でのすべての経験を、もれなく本活動の、そして中東和平実現についての次のステップに活かすことの決意を表明し、イスラエル、パレスチナからの参加者、および日本人学生の面々、そして本合同学生会議開催にあつて協力していただいたすべての方々への感謝を記してこの項を終わらせたいと思います。

ありがとうございました。



米田伊織

最終日、空港で彼らに別れを告げた後セキュリティチェックを通り抜けて行く姿を通して、私は半年前にイスラエル・パレスチナへ訪問したことを思い出しました。そして、別れ際に交わした別れの挨拶から、私は第6回合同学生会議開催が成功と言える会議だったと確信することができました。約3週間に及ぶ共同生活兼議論の場は、3地域から集った各自が参加者全員に対してお互いを理解しようとする努力を勤め、深い絆を創ってくれたように思います。まず、この団体におけるこの合同学生会議は決

してイスラエル対パレスチナだけの議論でなく、日本の視点が加わった状況が必然的に反映していると思います。現状でイスラエルの占領下にあるパレスチナ人が現地で議論の機会を得たところでプレッシャーと安全の不安を感じ、常に本心を議論しつづけることができるとは言えないと私は考えるからです。そのことを考えてみると、開催地が日本ということだけで環境的なプレッシャーがおさえられ本質を見据えた議論ができることがわかりました。特に、彼らの生活に密接に関わるトピックでは両者の熱い議論を見ることができました。イスラエル・パレスチナ両参加者が思いを抑えきれずに、実際議論中に涙を流したことから、お互いに現地で議論するときのような環境的なプレッシャーは無かったと言えると思います。

合同学生会議中、日本人参加者として何をすべきか、という問題意識が離れることはありませんでした。約1年かけてこの会議を準備し、現地を訪れ参加者を選考するという過程は決して安易に出来たことではなかったです。英語も日本語もまともに通じない場所がある土地へ行き、ニュースで目にした光景の中に自分がいることに全く恐怖心がなかったとも言えません。しかし、現地で私が受けたふるまいはとても素晴らしいもので全ての人々が共通に持っている優しさを私も体験させてもらうことが出来てとても感動しました。

更に、会議中自分が何をすべきなのかとても悩まされました。私が会議を通して常に出来たこと、それは毎日全員の参加者と話すということです。議論で熱くなっていた彼らに話しかけることを申し訳なく思うこともありますが、私たちがした質問には私たち以上の熱意を持って答えてくれます。そ

のことから私は彼らの置かれている現状の厳しさを知りましたし、知識だけでない多くを学ぶことが出来ました。

半年前の現地訪問から約3週間の合同学生会議終了までを通して、私は学生の視点からイスラエル・パレスチナ問題を学ぶことが出来たと思います。彼らから実際に話を聞くことが出来た現地訪問と議論の場が多様な機会を与えてくれました。そして、この会議が成功に終わったことは、彼らと一緒に過ごした時間を真剣に振り返り確信できました。

最後に、この合同学生会議実施にあたりご協力、ご支援を頂いた皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

イスラエル人参加者



オバディア アディ ハルフオン

まず初めに、私たちが敬遠しがちであることについて触れたいと思います。それはイスラエルとパレスチナは

共に、平和を創りうる指導者がいないことです。私はジャーナリストとして双方の多くの政治家に会いましたが、誰一人としてこの中東で起きている悲劇を止めうる人材には見えませんでした。

それでも私はこの会議に参加し、パレスチナ人に会うことを決意しました。会議中、私はいつもパレスチナ人と私たちが似たもの同士であることに驚かされました。確かに、私たちは国籍も宗教も言語も違います。しかし文化や食物、そしてユーモアのセンスを共有していることもまた事実です。私がこの会議を通して見つけたものは人間そのものです。それは私と同じように話し、行動する人間です。

私たちが友達になるために必要だった時間はほんのわずかでした。このことは私たち全員が教訓として覚えておくべきことです。明後日、私たちは日本を去り、自分たちの国に戻り、そこでは毎日紛争が続いています。この紛争はすぐには終わらないでしょう。平和というのは残念ながら近い将来には来ない夢のようなものです。私たちはこのことに対して多くの人々を責めることが出来ます。私たちは力のないリーダーを責めることが出来ますし、占領について責めることが出来ますし、テロリストを責めることが出来ます。それは間違いではありません。しかし、それは責任逃れのようなものです。私たち、普通に生活している人々がこの紛争の大きな原因のひとつなのです。しかし、また同時にいつかこの紛争を終わらせることができる希望でもあるのです。私たちがこの会議から得られるものがひとつでもあるのなら。それは私たちがお互いを同じような人間として理解できたことにあるでしょう。



イディス・ピック

この三週間、私たちは生まれて初めて共同生活をし、「何か」を作り上げました。その何かとは紛争について議論的となるような問題についての合意ではありません。

私たちが作り上げたものは「信頼」です。

私はパレスチナ人会い、彼らが彼らの価値や彼らの土地をととても大事にしていることに気づきました。しかし、それと同時にかれらは寛大であり、好奇心を持ち、私たちのことを理解しようとしていました。私は彼らが多くの偏見や悪いイメージなどのステレオタイプな「イスラエル人」としてではなく一

人の人間として接してくれたことをうれしく感じました。

パレスチナ人との会話やディスカッションは多くのことを私に教えてくれました。私は今まで以上に、この紛争をただ合理的に判断すべきではないと感じました。なぜなら、彼らが深く感情的なものを大切にしていることを理解したからです。そして、このことは本を読んでは学ぶことが出来ないものでした。

また、私は私たちの隣人の文化についてより詳しく知ることが出来たことをうれしく思います。彼らの文化は多くの面で私たちの文化と似ており、またイスラエルの文化の基ともなっています。またパレスチナ人と一緒に、私たちの文化とはまったく異なった文化である日本の文化を知ることが出来た

のはとても興味深い経験でした。

私はイスラエル人としてこの重要な会議に参加出来たことを嬉しく思い、帰国します。多くのイスラエル人が見失いがちである「希望」と共に帰国します。私は帰国後、両地域の多くの人々がお互いの隣人に対して抱いているイメージを変えたいと思っています。私はこの両地域の若い人々が会って話

す機会をもっと作ることをサポートしていきたいと考えています。また現存する多くの平和活動にもっと関わってきたいです。

私は将来、私たちが自由にテルアビブやラマツラで会えることを願います。



マタン ハレル フィッシュ

私は今回の合同学生会議に、第一にイスラエル人として、そして将来の目標である映画監督として参加しました。しかし、参加した目的は1

つでした。イスラエル人として、映画を製作する者として自分の経験をパレスチナ人と共有したいと考えていました。映画を作るということに私は重い責任を感じています。良い映画は、それを観る人々に現実を示す力を持ちます。また、映画は人の意見を変え、異なる観点から物事をみるきっかけを与えます。これまで、紛争に関する映画の脚本を書きながら、何が真実かと考えることが多かったです。私自身の経験と信念を示すことで、そこにある事実を本当に描いているのかという疑問を抱くようになりました。それが公平で、偏見のないものかと問い続けていました。私は常に自分の知るイスラエル人を通して、イスラエルを表現してきました。日常における幸せや優しさ、悲しみ、恐怖を感じながら話を描きました。時に現実離れた考えが頭に浮かぶこともあります。なぜなら、自分はイスラエルの文化のみを知り、それを私の目線から表現しようとするからです。パレスチナ人の視点を

意識しながらも、相手のことを知らないままに私の兵役での経験やメディア、書籍といった情報を頼りに相手の固定化された姿を描いていました。参加前は隣人の実像や紛争の全体像を知らなかったと認識しています。そして会議を通して、私の中で考えが変わったことを実感しています。

合同学生会議初日にパレスチナ人参加者と会った時、私は彼らを警戒し猜疑(さいぎ)心を抱きました。しかし、3週間彼ら紛争について異なる考えをぶつけ合い、個人の経験について語り合い、ともに笑い、料理をして、時に涙を流したことで、思いがけないものを手に入れることができました。それは7人の中東の友人です。会議に参加した両者の間で真の平和を築くことが出来たと感じています。イスラエルにある自分の家から1時間で行ける距離で暮らす人々に会うために飛行機で地球をまたぐ必要があるのは皮肉なことです。しかし、この合同学生会議は私たちの社会と国に独特の機会を提供し重要な役割を果たしています。そして、たくさんの意見や経験をパレスチナ人参加者3名と参加者で唯一のアラブ系イスラエル人の話から得ることができ、私の話を彼らが聞いてくれたことに感謝しています。私は今後もいろいろな知識を得たいと考えています。しかし、会議を経て紛争の実情をさらに理解したいま、私の映画作りでの紛争の描き方にも変化が起きたと確信しています。



ヤニーナ ラベド

私は、合同学生会議が始まった直後の時点では、イスラエル人・パレスチナ人参加者が共にある種の思い違い、間違っ

た認識を抱いているように感じていました。

合同学生会議の中において、思い違いが誤りであることが明らかになり、間違っ

た認識についての誤りを正す機会を得られたことに深く感謝しています。

私たちがイスラエル人とパレスチナ人、あるいは他のあらゆる対立する集団の間において、真の理解と関係の改善を果たすための意義深い努力の数々は、こうした機会を得、認識を正した上で、初めて可能になることです。

私は今、どうすれば私たちの過去における諍(いさか)いの相手、未来におけるパートナーを理解するかの方法を理解するに至り、自分がより良

い選択と決断を下すことができていると感じています。

また、アラブ文化やアラビア語についての理解も深まりました。私はこれまで以上に勉学に励み、自分の責任を果たそうと思いを新たにしていますし、その実行を始めたばかりです。

私は今、文化的征服という概念を用いて、ムスリム世界における道徳観を研究しており、論文の作成に取り組んでいます。そして、私は精神医学を学ぶ者として赤十字の活動に携わっているのですが、その研修先であるイタリアから母国イスラエルに帰った後は、

イスラエル国内におけるユダヤ人とアラブ人の対話の促進を目的とした NGO に所属し、そこでの活動を開始する予定です。

私の中の思い違い、パレスチナの人々に限らず、アラブ人全体に対する誤った認識を、私は本合同学生会議の中で正すことができました。

これらはひとえに日本人参加者の努力のおかげであり、本合同学生会議の開催に尽力くださった各関係者の方々に深く感謝しています。



ラワン・サバーバ

私の父はイスラエルのナザレ出身で、母はパレスチナ西岸地区のベツレヘム出身です。私はイスラエルとパレスチナ双方に友人を持っています。しか

し、両者に同時に会う機会はこれまでありませんでした。そして、この合同学生会議で初めて私の人生を形づくる2つの要素であるイスラエル人とパ

レスチナ人に会うことができました。私は今回の合同学生会議に参加する前、恐怖を感じていました。というのも、両者がどれほどつらい人生を過ごしてきたかを知っており、両者の考えの食い違いが大きいものであると感じていたからです。しかし両者に会った時に、私は自分がイスラエルとパレスチナの架け橋のような存在になるのではないかと思います。3週間の合同学生会議を終えた今、意見や背景の違いにもかかわらず、私たちこの取り扱いの難しい両者の問題をお互いの伝統や文化、感情的になってしまうような個人の経験を尊重しな

が話し合い、解決策を見いだすことが出来たことに、驚きと同時に喜びを感じています。

この貴重で素晴らしい経験を通して、「両者が幸福を追求してともに行動することで平和を構築することが出来る」という私の信念はより強くなりました。そして同時に、私たち若者がこの合同学生会議を

通して成し遂げたものが、より強いリーダーシップとして発揮されることを期待しています。また、この合同学生会議が、将来の平和に向けて十分な力を注ぐ新しい世代のリーダー達を生むような組織の先例となることを期待しています。

パレスチナ人参加者

アラール

私にとって合同学生会議での経験はとても光栄なことでした。私にとって人生は先生であり、そこから私たちはたくさんの情報を学ぶことができ、人生を通した経験の積み重ねは、私の中に一生残るものです。今回参加した合同学生会議は、人生で最も貴重で価値のある経験となりました。イスラエル人とともに毎日を過ごすだけでも独特の経験と言えます。そして、私はこの会議を通して多くのことを学びました。まず、私は他者の視点を学ぶことが出来ました。その上で得た情報を集めて何が正しく、何が間違いであるかを見極めることで、以前の私の見方と異なる真実を見いだすことができました。議論では自分たちが見識を1つにするものの難しい問題について話しましたが、顔を合わせ

て話をして双方の為になる解決策を一緒に考えたことで、両者が平和の為になんができるかを知りました。例えばパレスチナ難民の問題に関しては、パレスチナ国家の建設とそこへの国外難民の帰還でイスラエル人学生と合意しました。私は平和への道はこのような妥協の繰り返しだと思います。

合同学生会議では、私がこれまで知る由もなかったイスラエルの文化についても多くを学びました。人を知る為にはまずその人の文化を知る必要があると思います。最後になりますが、日本で戦争が終結してから65年がたったいま、再建を果たした日本の地で感じたことは、たとえ紛争が複雑な問題をもたらし、そこに多くの障壁が残っていても対話を通して両者の溝を埋めることが可能だということでした。

バハエディン

この合同学生会議は来日の機会を与えてくれ、私たちが抱える紛争について、日本の人々、イスラエルの人々と話し合い、議論することを可能にしてくれました。暴力的な事態が今なお進行中である、パレスチナとイスラエルからは遠く離れたこの地でこそ、そのことは可能になります。

この合同学生会議を通じて、私は多くのことを学びました。私は今、私が何をしたいのか、未来において何をすべきなのか、強く確信しています。私は

この合同学生会議の中で、パレスチナとイスラエルの間に横たわる誤解という名の溝を埋めることができた、ということに深い喜びを感じています。また、ここでの経験は、私たちの抱える問題点をより明らかにもしてくれました。

私たちは多くのことについて語り合い、互いの意見に耳を傾け、世界のすべての人々がそうであるように、私たちが抱える苦しみと平和への希望について、思いを交わすことができました。

日本に来て思ったこととしては、私が故郷では持ちえないような安心感を抱けたことが挙げられ

ます。そして今、私はこれまで以上に平和と、平和に生活を送れることの価値を深く感じています。加えて、私は、私の故郷の平和を築き上げることに努力したいと思いを新たにしています。そして、私たちには平和な生活を送る権利があると信じています。

イスラエルからの参加者は、私たちが独立した、安全の保障された生活を送る権利を有していることに対して理解を示し、考えを受け入れてくれました。これを受け、私は和平実現が、決して不可能なものではないのだと思うに至りました。

私たちはより現実的に考える必要があり、イスラエルとパレスチナが、私たちと新しい次の世代によって幸せに満ちた未来を築き上げる必要があります。

ラワン

この合同学生会議は多くの事実に対して意見を広げてくれました。

私はとうとう普通のイスラエル人がどのように考えているか理解することが出来ました。

合同学生会議で、私は初めてイスラエル人に会いました。そしてこの特別な文化的、政治的経験の中で私たちは多くの点で共通していること、そして私たちは同じ人間であること以上に重要なものはないと気づきました。

す。

さらに、合同学生会議での経験は、私たちが新しい文化を理解する素晴らしい機会を与えてくれました。それらは、私が心をより広くもち、偏見から逃れ、より俯瞰的(ふかんてき)な視点から自らの問題を考えることを可能にしてくれました。私はこのような機会を得られたことに深く感謝しています。ありがとうございました。

私はバーレーンでアラビア語の新聞記者として働いているので、占領下にあるパレスチナの生活について多くの記事を書いてきました。

私はこれからも紛争について書き続けていく予定ですが、これからは平和を信じることの重要性を広めるために最善を尽くし、働き続けていきたいと考えています。